

どうわの うみへ

海の子サマ

有馬志津子・作
アリマ・ジュンコ・絵



太平けっさく童話●どうわのうみへ①
海の子サブ

一九八〇年五月一〇日 第一刷発行



著者 有馬志津子

画家 アリマ・ジュンコ

発行者 崔 容徳

発行所 株式会社 **太平出版社**

東京都千代田区神田神保町一四六二 美成社ビル
電話 〇三九五五三二(代) 振替 〇東京一〇九九五六三
落丁・乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバー・オビ・スリッパに表示してあります

913 有馬志津子

海の子サブ

太平出版社 1980

80 P 22cm

どうわの うみへ①

海の子サング

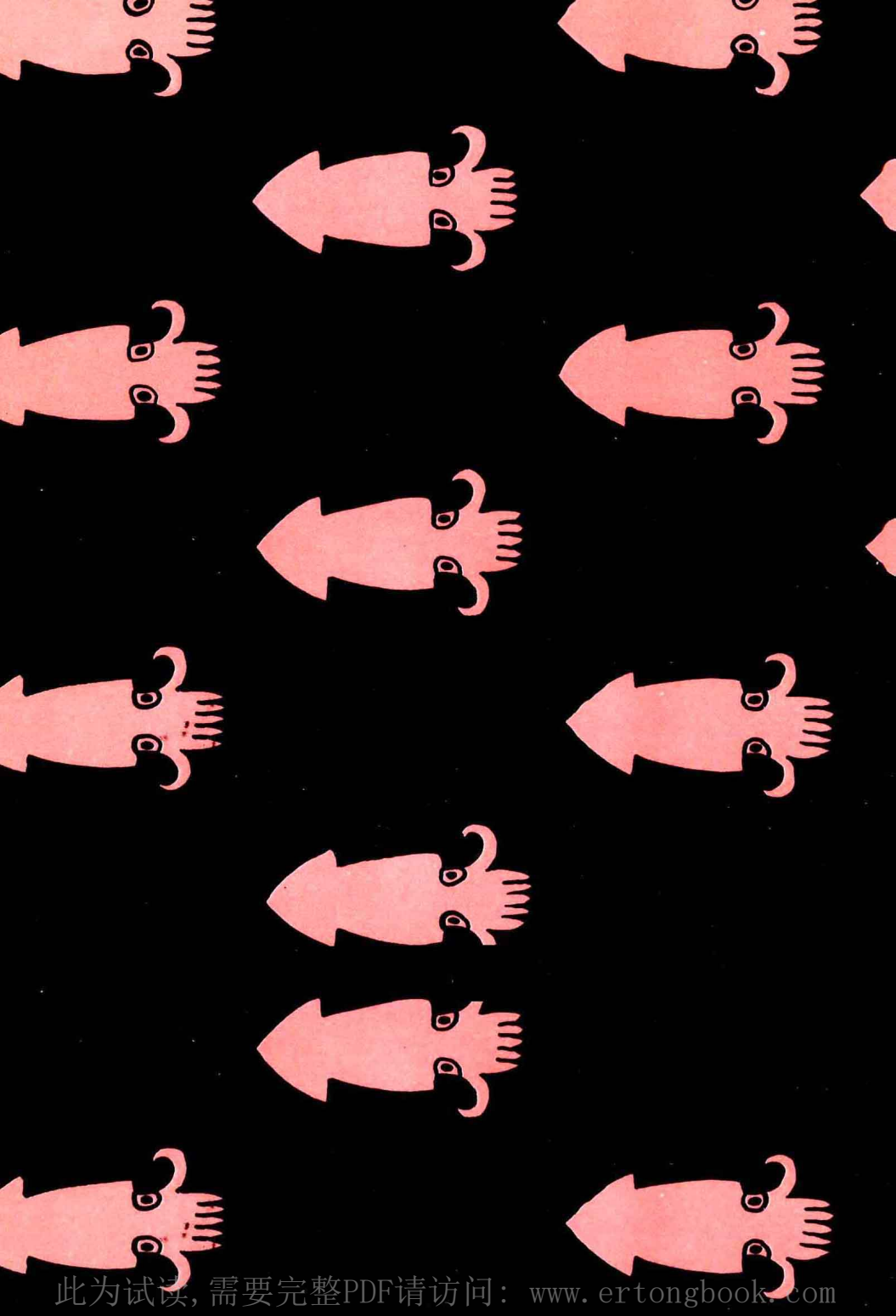
有馬志津子・作
アリマ・ジュンコ・絵

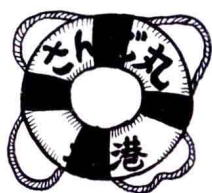


太平洋
けっさく
童話

880円







筆者紹介

有馬志津子 ありましずこ

一九二五年福井県に生まれる。福井県立三国高女卒業。
日本児童文学者協会会員。絵本や幼年童話で活躍して
いる。おもな作品に『ぞうのあかちゃん』（太平出版社
刊）、『アントワープの木ぐつ』『いたずらピカロ』『さよ
ならよさえむさん』などがある。

アリマ・ジュンコ

一九四九年東京に生まれる。学習院大学仏文科卒業。
在学中から童話やさし絵をかき始める。児童出版美
術家連盟・現代童画会会員。『ぞうのあかちゃん』な
ど有馬志津子さんと母子で組んだ作品も多い。

海の子サブ

有馬志津子・作 アリマ・ジュンコ・絵



太平出版社

まっ黒くろに日ひやけしたサブさぶは、海うみのにおいがする。

三年生ねんせいにしては、ちびだ。でも、かぜひとつひいたことのないからだは、くりくりして、どこをおしても、はねかえし
そうだ。

五月がつになると、サブは、もうお天気てんきさえよければ、まいにち海うみへいく。

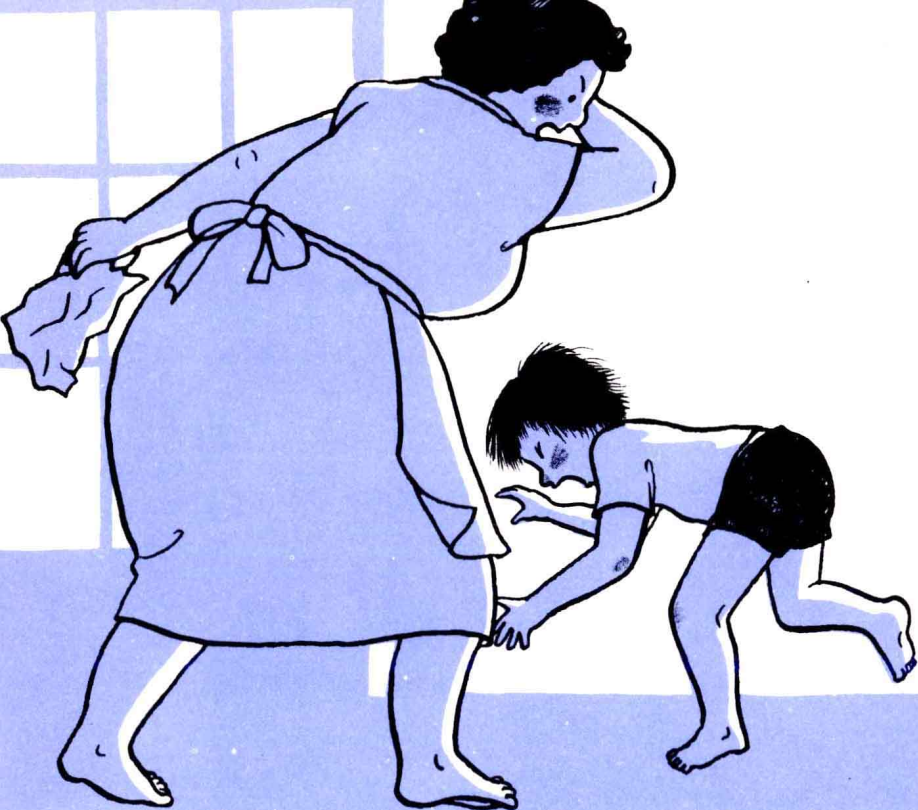


学校がっこうからかえると、えんがわへかばんをなげだして、さつとかけだす。まるでマラソンのおりかえし点てんだ。かあちゃんにえり首くびでもつかまれないかぎり、夕方ゆうがたまでもどらない。

「はらへったあ！」

いばって、うすぐらくなつたえんがわへあがってきて、かあちゃんからいきなり、バーンとおしりをぶたれることがある。

そんなときのかあちゃんは、たいてい、かばんからでてきた、くしゃくしゃのテストをにぎっているからふしぎだ。どうして、わかるのだろう。



水^{みず}につかりすぎて、手^てのひ
らや足^{あし}のうらが、まっ白^{しろ}にふ
やけたサブが、

「うおーっ。」

と、ほえるようになきたてる
と、耳^{みみ}のとおいばあちゃん
までが、びっくりする。

「またかい。かあちゃんに、
あやまれ。」

ばあちゃんが、しんぱいそ

うによってきてなだめても、サブはぜったいにあやまらない。
かあちゃんのほうで、うるさくてがまんできなくなつて、

「やめろっ。」とくるまで、なきたてる。

そして、黒い顔をまっかにして、くつてかかる。

「テストだけできめちゃ、いけないやい！ 先生がいったぞ。

なんでもいい、ひとつでもいいから、人にまけないことがで
きる人間になれって。おれ、およぐことなら、四年のやつに
だって、五年のやつにだって、まけないんだぞう！」

サブは、灯台から、いりえのかなり大きな湾を、およいで
よこぎることができる。三年生では、たったひとりだ。てん

ま船^{せん}だって、もうじょうずにこげる。

サブはおもう。

（ああ、はやく、ポンポン船^{せん}のサン
ゴ丸^{まる}にのりたいな。とうちゃんや、に
いちゃんたちといっしょに、とおい
おきまでいってみたいな。」

しかし、とうちゃんは、なかなか
サンゴ丸^{まる}にのせてくれないのだ。

「来年^{らいねん}の夏休^{なつやす}みまで、まで。」

と、いつもきまっという。



「いつの来年^{らいねん}だあ。きよ年^{ねん}も、そのまえも、
そういったじゃん、やくそくしたじゃん！」

サブは、こんどこそきかなかった。

きょうも、とうちゃんは、イカつり
にでかけるしたくをしながら、いった
のだ。

「サブみたいなチビッコに、船^{ふね}の上^{うへ}で
うろちよろされちゃ、しごとができん
わい。ろくにおよげねえくせして。」

「およげるわい！ おれは、五年生^{ねんせい}にだ



ってまけねえんだぞう。しらないのは
とうちゃんだけだあ、んもうっ！」

サブはくやしくなって、
しゃくりあげてしまった。

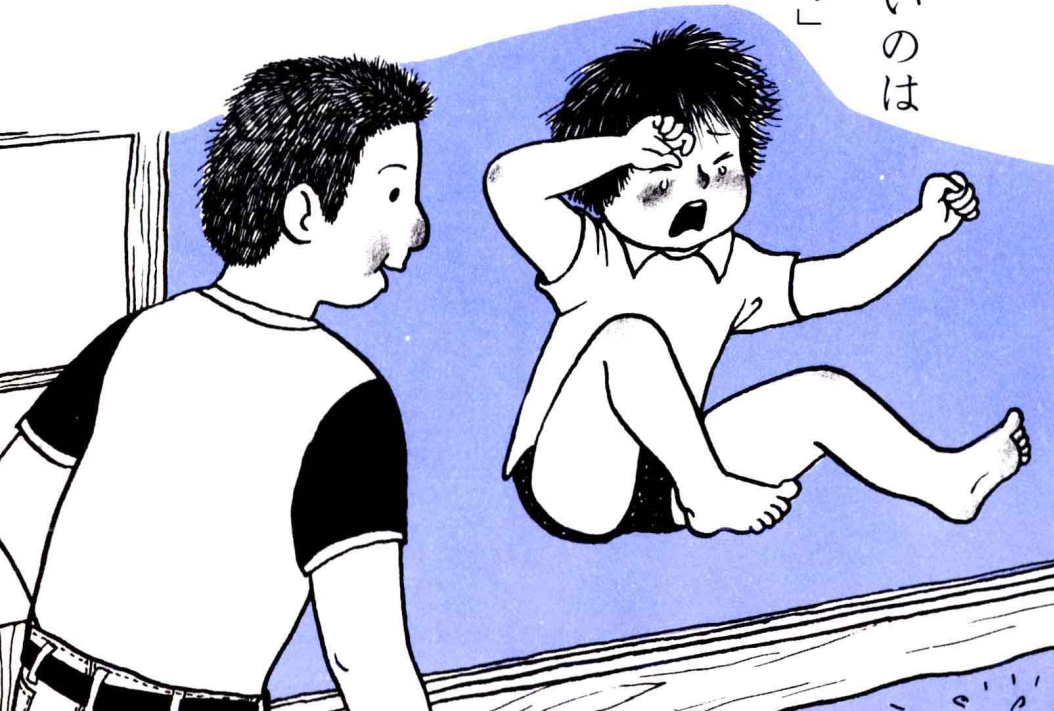
すると、にいちゃんが、
わきからいってくれたのだ。

「いいじゃないか。おれだっ

て、三年生^{ねんせい}の夏休み^{なつやす}から、じ

いちゃんのおゆるしがでて、

サンゴ丸^{まる}にのせてもらったんだ。



ちびだって、もうだいじょうぶさ。おれが、
かんとくすっから。」

「サンキュ！」

サブはかんげきして、にいちゃんにだき
ついた。にいちゃんは、ずでんとサブにせ
おいなげをかけ、むねをそらしていった。
「いいか。そのかわり、おれのめいれいに
は、ぜったいふくじゅうだぞ。」

「ハイ、カントク！」

サブははねおきて、みぎで右手を高くあげた。たか



「よし！　今夜、つれてってやろう。」

にいちちゃんがえらそうに、あごをしゃくると、あかちゃんにおっぱいをのませていたかあちゃんがいった。

「いたずらしたり、いうことかなかったりしたら、えんりよせんでもいいよ。海へほっぽりだして、フカにでもサメにでも、くわせてやりな。アッハッハ。」

男おとこみたいにわらっているかあちゃんのふとったせなかを、サブはパシッとぶった。

ばあちゃんはいった。

「よかったな、サブ。やっとのつけてもらえて……。なあ、